■サンキューセミナー「国際保健・理論と実務〜抗生物質と人間、世界の保健政策〜」

■2019年7月5日開催（日本リザルツ東京事務所）

■講師　長崎大学熱帯医学研究所教授　山本太郎氏、国立国際医療研究センター国際医療協力局局長　井上馨氏

■講演内容

山本氏はペニシリンが実用化され、世界中で感染症が激減、その後半世紀経ち、①薬剤耐性菌②肥満・糖尿病・アレルギー・自閉症等の病気が増えたことに言及。「抗生物質の使用が我々の常在菌を減少させ、そのことが病気を引き起こすのであれば、実は、細菌は少ないよりも多い方がいいかもしれない」と問題提起した。「砂漠で乳製品ばかり食べている人たちは我々と異なるマイクロバイオームを持つが、健康である」と指摘した。一方、井上氏は「グローバルヘルスは、国境を越えて地球全体の共通課題に挑んでいる。この傾向はここ10年で強まった」としたうえで、「移転可能な日本のノウハウは減少している」と指摘。虐待や発達障害という小児保健の問題は低所得国における主要課題ではなく、日本がどうすれば国民皆保険制度を維持できるか一生懸命考えて試行錯誤を繰り返す過程そのものが重要な知見になるとした。